

ケースメソッドを適用したプロジェクト・マネージャー育成の取り組み

木村 良一
産業技術大学院大学
a1815rk@aiit.ac.jp

要旨

本稿では、専門職大学院である東京都立産業技術大学院大学(以降、「本学」とする)における、模擬シナリオを用いたケースメソッドを適用したプロジェクト・マネージャー育成の取り組みについて報告する。

1. はじめに

変化の激しい経営環境において、プロジェクトが成功するためには、プロジェクト・マネジメントの知識だけでは不十分である。本学ではPMの初級教育にケースメソッドを取り入れ、気づきを中心としたPM教育を行っている。

2. 一般的なケースメソッド

高木・竹内によると、ケースメソッドを用いた学習のポイントは以下に整理される。

- [1] ケース教材: 企業で実際に発生した出来事を切り取りケース教材とする。
- [2] 授業内容: ケース教材について、個人による予習を行い、グループ討議を経て全体でのクラス討議を行う。クラス討議では、個人の気づきをもとに、学習者同士が議論することにより、新たな考えに触れ、自身の気づきを深める。
- [3] 講師の役割: 講師はディスカッションリーダーシップをとることでクラスの議論が有益な展開になるように論点の流れの舵をとる。

3. プロジェクト・マネージャー育成の取り組み

本学では、1年次にて基本的な知識・スキルを学修し、2年次にてPBL型教育で業務遂行能力を獲得する。ケースメソッドを用いた授業はPBL型教育の一環として、初級者PMを対象に実施している。

以下にそのポイントについて示す。

3.1. シナリオ型ケースメソッドによる全体像の把握

学習者は立ち上げから終結までの一貫した模擬シナリオをもとに作成したケースで学習する。この「シナリオ型ケースメソッド」により、学習者はプロジェクトの全体像を俯瞰することができるとともに、個々の局面におけるプロジェクト・マネジメントの勘所を理解することができる。

3.2. 2段階の「気づき」が得られる構成

授業の構成は、少人数のPBL型教育のため、個人による予習とグループ学習の2段階としている。

個人による予習では、事前テストにより該当フェーズの学習に必要な知識を整理した後にケースの事前学習を行うことで、学習者個人としての「気づき」(内発的気づき)を得る。グループ学習では、学習者全員の参加により、事前テストについての知見の共有、議論を行った後、ケースに基づく議論を行い、グループとしての「気づき」(外発的気づき)を得る。さらに、復習課題の議論により獲得した「気づき」を深めていく。

3.3. 学習者自身によるディスカッションリード

授業の目的は、プロジェクト・マネージャーの育成である。授業そのものも一つのプロジェクトとして捉え、原則として学習者自身によるファシリテーションで運営する。

4. おわりに

ケースメソッドを適用したプロジェクト・マネジメントの学習は知識や技術の獲得ではなく、学習者自身の思考特性や行動特性の変容に効果的であると考えており、今後、中級、上級者への教育についても考えていきたい。

参考文献

- [1] 高木晴夫, 竹内伸一, ケースメソッド教授法入門, 慶應義塾大学出版会, 2010
- [2] 高木晴夫, 組織マネジメント戦略, 有斐閣, 2005